

ふれてくる。春はドッチボール、ピ
玉、めんこ、夏は水泳、秋は雑木林を
かけ回り、冬はスキーとそりのり、そ
のころの歓声までが、伊南川の水面に
広がっていく。あのころは、川の水も
多く、大きく思えた伊南川が、小さく
感じるのには、私の体の成長のせいなの
か、それとも自然が小さくなったため
だろうかと思想にふける。

朝日とともに、その川面の鏡を破っ
て鮎がはねる。一瞬の喜び、再び鮎の
はねあがる姿を見ようと目を凝らす。
しかし、その確かな姿を目にとどめる
ことができないで、水面にいくつかの
輪の広がりを見るだけだった。夫に勤
められるままに、水眼鏡でのぞくと、
全身がゾクツとするほどの水の冷たさ
と神秘的な水中の美しさに魅了された。

白や黒、茶の小石を色鮮やかにちり
ばめた川床、大石には緑色のコケや緑
藻が生き生きと生長している姿、その
空間に、藍黒色を帯びたオリブ色の
生気あふれる優雅な鮎の動きに、感動
せずにはいられなかった。水面の美し
さにもまして、水中の美しさがこれほ
どすばらしいものとは思っても見な
かった。つい今まで、自然の外観的な
美しさばかりに目や心を奪われ、その
奥に潜む真の美に気がつかなかつたり
むしろ、見ようとしないうちを過ごし
ていたように思える。

今年もまた、三十一名のさわやかな
若鮎たちに出会うことができた。この
若鮎たちの表面の美しさだけに目を奪

われることなく、その陰に潜む真の心
の美しさや人間としてのすばらしさに
目を向けてやりたいと思っている。
すこやかなわが子の成長を願う父兄
のみなさんとともに。

雪解けのせせらぎの中を
ひきしまったからだで
すばしっこく動きまわれ
若鮎たち

朝焼けの静かな水面を
自分のすべてを躍動させ
とびはねては輪をつくれ
若鮎たち

伊南川のさわやかな流れ
伊南川の美しい流れ

そのしなやかな心とからだを
惜しむことなく躍らせよ

三十一匹の若鮎たち

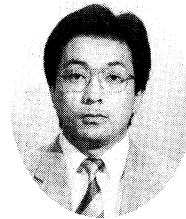
(学級通信「若鮎」より)

(伊南村立伊南中学校教諭)



私の中の春

石本 健



福島に赴任してきて四度目の春を迎
えた。今年は暖冬だったせいとか、桜前
線の北上も早く、四月初旬には県庁裏
の阿武隈川に面した土手の桜がすでに
ほころんでいた。桃やこぶしや菜の花
も先を競うかの如く咲き乱れ、まさに
百花繚乱、春爛漫である。

春はまた、街中でオートバイを見か
ける機会の多くなる季節でもある。最
近は中年ライダーや女性ライダーの増
加も目覚ましく、ちょっとした自動車
よりも高価なオートバイに乗っている
人も多い。私はそれを、羨望と諦念の
入り混じったまなざしで見ているので
ある。目に映るライダーにかつての自
分の姿をオーバーラップさせながら。

私とオートバイとの出会いは大学に
入学してからのことだった。最初は原
付バイクで満足していた私であったが、

半年もすると原付には飽き足らず、自
動二輪の免許を取ってオートバイにま
たがっていた。二年生の夏休みに、同
じ下宿の仲間三人と東北一周ツーリン
グをしたのだが、その時の感動が忘れ
られず、三年の時は北海道、四年では
九州そして北陸を回って歩いた(走っ
た)。

オートバイの魅力は、むき出しのエ
ンジンから太いマフラーを伝って出る
「ビリビリビリ」という独特の排気音
と、体の中までをも風が吹き抜けるよ
うな、走行時の爽快感にある。また、
オートバイ旅行は、電車や飛行機の旅
行と違い、自らの意思と体力で目的地
にたどり着いたのだという充実感を持
てるとうところがいい。自動車ではどうし
ても「車に連れていってもらった」と
いう感が拭いきれないし、自転車では
一日で動ける範囲が狭すぎる。私が
オートバイを愛したゆえんである。

だが、オートバイもいいことばかり
ではない。宮崎の日南海岸を走ったと
きは一日中雨にたたられ、カップを着
ていたにもかかわらず、宿に着いた時
にはパンツまでぐしょぐしょになって
しまっていたし、春先のツーリングで
は、前を走る車に道路の雪だけ水を跳
ねあげられて泥まみれになったことも
あった。それでも、旅行で同じように
ツーリングをしている人たちとすれ違
うときに交わすピースサインは、そん
なつらいことを一ぺんに吹き飛ばして
くれる。